





第三章

強壯ノ人及ビ病羸ノ人

大正十一年四月
大隈侯爵寄贈

一八五二年—一八五四年

○(一)一八五二年ニ於ケル日耳曼及ビ「ゾルガ
 エー」同盟ノ危機 ○(二)尼哥拉士一世、アブラ
 ヲル、ノゲツド及ビ土耳其格ノ新制度 ○(三)モ
 テ子グロ問題 ○(四)靈地事件、露佛葛藤ノ起因
 ○(五)拿破侖三世ノ即位、歐洲列國佛國ノ帝
 政ヲ承認ス ○(六)日耳曼及ビ東方ニ於ケル姑
 息ノ靜平 ○(七)聖彼得堡ニ於ケル談話 ○(八)ノ
 ニチコツフノ使命 ○(九)ガニエーフ沿岸ニ於
 ケル露國 ○(十)維納ニ於ケル平和党及ビ君子
 丹丁堡ニ於ケル主戰党 ○(十一)一八五三年十
 二月五日ノ議定書 ○(十二)シノツフ事件及ビ

ツノ影響〇(十三)同盟組織ニ關スル露帝ノ畫
策〇(十四)普國ノ態度及ビ露國ニ對スル四國
同盟ノ方案〇(十五)英佛同盟(一八五四年四月)

(一)

一八五二年ノ半ニ於テ「ゾルヴェイ」同盟ハ
頗ル危險ノ状態ヲ呈シ當時歐洲列國ノ最モ憂
慮スル所ハ蓋シ該問題ノ右ニ出ツル者アラサ
リキ是ヨリ先キスワルゼンベルグノ死スルヤ
普國ハツノ後ヲ承テ墺國ノ大政ヲ統ブル者
ノ庸劣與ミシ易キヲ視テ大ニ意ヲ強クシ極力
澳國ノ政策ニ反抗セシコトヲ計レリ蓋シ澳帝
フランソワ、ジヨゼフハ人トナリ勤勉ニシテ
又且ツ頗ル學識ニ富メリト雖モ而カモ大志雄

略ニ乏クシテ固ヨリ大事ヲ為スノ器ニアラバ
帝ハスワルゼンベルグノ死後ビエオール、スホ
ーエンス、テイ、伯ヲ擧ゲテ之ニ大小ノ政務ヲ
委子タリシガ伯ハ元來メテルニツヒテ學ビテ
尚ホ未カ至ラサルモノニシテソノ師ノ僻見迷
說ハ都ベテ之ヲ繼紹セリト雖ドモソノ事前ニ
察スルノ明、事難ニ應スル才ニ至リテ固ヨリ遠
ク師ニ及ブコト能ハズ而モ彼レハ自ラ信スル
コト極メテ厚ク自ラ視テ不世出ノ英才ナリトナ
シソノ師ト均シク政治ヲ以テ權變譎詐ノ術ニ
外ナラスト思料シ務メテ尊大ノ風ヲ粧フテ一
時世人ヲ瞞着セリト雖トモ世人ハ久シカラズ
ヒテ皆ツノ無能為スアルニ足ラザルヲ知り當

時フラシクフオールノ議會ニ於テ普國ヲ代表
セルビスマルクノ如キハ從來澳國ニ對シテ頗
ル好意ヲ表シタルニ係ハラスビエオールノ傲
慢不遜ナルヲ憤ホリ公然澳國ニ對シテ敵意ヲ
ヲ表スルニ至レリ且ツビスマルクノ機敏ナル
日ナラスシテ澳國新首相ノ庸劣與ニシ易キヲ
看破シ「ゾルヴエレイ」同盟ニ關シ最モ大担ナ
ル措置ニ出テムコトヲ普國政府ニ勸告シ因リ
テ以テ大ニ歐洲列國ノ耳目ヲ聳動シタリ蓋シ
ビスマルクハ年尚ホ若クシテ未ダ外交上ノ經
驗ヲ有セスト雖トモツノ報告ノ明確ナルツノ
人物及ビ事物ニ對スル評論ノ剴切ナルツノ先
見ノ明ニ富メルツノ術略横出シテ曾テ窮スル

所ナキノ故ニ由リツノ先輩ニ挺テ、大ニ普王
フレデリック、キールムノ信用ヲ博シ當時日
耳曼ノ二等國ハブリスト及ビプロオルテノ勸
誘ニ由リ相率ヒテ普國ノ日耳曼統一策ニ反抗
セリト雖ドモ彼レハ唯之ヲ一笑ニ附シテ顧ミ
ルコトナク日耳曼國民ガ既ニ固ク「ゾルヴエレ
イ」同盟ト連結シ決シテ二三君主ノ力ヲ以テ
之ヲ解クコト能ハサルヲ看取シ屢々普王ニ說
クニ二等國ノ反對運動ヲツノ意ニ介スルコト
勿ラムコトヲ以テシ普王モ亦ツノ說ヲ容レテ
一八五二年四月二十日「ゾルヴエレイ」同盟ニ
加入セル諸國ノ全權委員ヲツノ首都柏林ニ招
集シテ會議ヲ開キ以テ同盟ノ再訂ヲ求メタル

ニ往キニタルムスタッドニ會合シテ秘密條約
ヲ締結シタル諸國ノ使臣ハ澳國ヲシテ亦ツノ
會議ニ列セシノムコトヲ要求シツノ要求ノ容
シラレサル間ハ「ブルグユレイ」同盟ノ再訂ニ
關スル談判ヲ開クコト能ハスト主張シ激論數
月ニ彌リテ決スル所アラサリシモ普國政府ハ
之レガ為ノ毫モツノ決心ヲ翻スコトナクビス
マルクノ報告ニ由リテ日耳曼ノ輿論ノ自國ニ
利ナルヲ看取シ九月二十七日突然會議ヲ中止
シテ談判不調ニ歸シタルコトヲ宣言シ關係諸
國ニ向ヒ各個特別ニ同盟再訂ノ談判ヲ開クベ
キヲ告ゲリ是ニ於テ日耳曼國民ハ「ブルグユレ
イ」同盟ヲ以テ復々再訂ノ望ナシト思料シ頓

ニ大ニ憂懼ノ念ヲ生シブリスト及ビソノ同盟
ハ勝利我ニ在リトナシ更ニソノカヲ竭クシテ
澳國ト共ニ特別ノ協定ヲ遂ケレコトヲ計リ澳
普二國ノ間ニハ再ビ激烈ナル抗争ヲ生セシト
スルノ勢ヲ呈シタリ
然レドモ此時ニ於テモ苟モ周到ノ思慮ヲ有ス
ル者ハ敢テ輕々シク澳普ノ間ニ戰ヲ開クベキ
ヲ思料スルコトアラサリキツノ故他ナシ澳帝
フラシフ、ジヨゼフハ往キニ一八四八年ニ於
ケル革命ノ變乱ヲ記憶シテ忘ルコトナク今
若シ普國ト戰ヲ開クトキハ之レガ為メ再ビ同
一ノ變乱ヲ招致センコトヲ憂懼シ而シテ普王
フレデリック、ギーオームハ「オールの」ニツツノ失

敗以來痛クツノ勇氣ヲ沮喪シ敢テ奮テツノ耻辱ヲ雪カレトスルノ意アラサレバナリ

(二)

然レドモ澳普ノ間ニ戰意ナキガ為ノ日耳曼ノ危機ハ毫モ憂慮ヲ須ヒスト言フベキニアラズ加フルニ當時土耳其格ニ於テハ復タ又騷乱ノ徵候ヲ呈シ而シテツノ反響ハ將ニ施キテ中央歐羅巴ニ及ホサレトシ列國ノ人心ヲシテ恟々安シズル所ヲ知ラガラシメタリ
露帝尼哥拉士一世ハ夙トニツノ祖先ノ遺志ヲ繼承シ加フルニツノ臣民ノ宗教的熱心ニ鼓吹セラレテ常ニ土耳其帝國內ニ於ケル希臘教ノ保護者ヲ以テ自ラ任シツノ即位ノ始ノヨリ或

ハ全ク土耳其格ヲ覆滅スルカ或ハ之ヲシテ常ニ自國ノ制令ニ服従セシムルカ二者必スツノ一ニ出デレト欲シ而シテツノ土廷ヲシテ自國ノ制令ニ服従セシムルノ一事ハ往年露土ノ間ニ訂結セルアンドリノール及ビアレキヤルスケレツシノ條約ニ由リテ粗ボツノ目的ヲ達シタルノ觀アリ故ニ歐洲列國ハ爾來土耳其格ニ於ケル露國ガ勢力ノ強大ニ過グルヲ憂ヘ往キニ一八四一年ヲ以テ諸強國相俱ニカヲ戮セテ土耳其格ノ獨立ヲ保護スルノ必要ナルヲ宣言セリト虽ドモ凡ソ此類ノ宣言ハ元來空言事ニ益ナキ者ニシテ苟モ土耳其格ニシテ果シテツノ獨立ヲ全クセレト欲セハ須ラツノ内政ヲ改革

レテ時勢ノ必要ニ應セサルベカラヌ故ニ土廷
八一八三九年以采新土耳其格党ノ首領レシード
パシヤールノ意見ヲ容レテ内政ノ改革ニ着手シ
新帝アルゲエル、ノゲツドハ勅令ヲ下ガシテ新
クニ郡會村會等ヲ設ケ司法制度ヲ改正シテ法
律上ノ平等ヲ定メ收税及ビ徵兵ノ法ヲ一定シ
タレハ數年ヲ出デスシテ土耳其格ノ國運ハ大ニ
ツノ隆盛ヲ加ヘ以テ能ク歐洲強大國ノ侵略ニ
抗スルニ足ルノ望ミナシトセズ是ニ於テ露帝
ハ大ニ之ヲ憂慮シ土廷ヲシテツノ改革ヲ遂行
スルコト能ハカラシメト欲シ一方ニハ土國
内ニ居住スル基督教徒ヲ使喚シテ新制度ノ実
行ヲ妨害セシメ他方ニハ歐洲列國ニ向ッテ土

廷ノ弊政ノ到底救治スヘカラサルヲ聲言シ一
八四四年ニハ英國政府ニ向ヒテ土耳其格ヲ分割
スルノ說ヲ提出セシモツノ容ル、所ナラズ次
イテ翌一八四五年ニ至リ從來旧土耳其格党ノ為
メニ排斥セラレタルレシツトパシヤールカ再ビ
土廷ノ政柄ヲ握リ銳意シテ國政ノ改革ヲ実行
スルヲ視テ露帝ハ益々ツノ憂懼ノ念ヲ深クセ
リ既ニシテ一八四八年ニ於ケル革命ノ變乱ア
リ土廷ハ是ヨリ先キ一八四二年以來セルガイ
ニ於テ既ニ大ニ勢力ヲ扶植シタルヲ以テ今ヤ
モルタウガイ及ビワラシノ二州ニ革命ノ變
乱ノ起レルヲ視テ心竊カニ之ヲ喜ビ露軍ニ應
援ヲ與フルヲ名トシテツノ兵ヲ二州ニ出ダシ

ワノ実ハ之ニ因リテ露軍ノ運動ヲ制時セムコ
トヲ計レリ次テ土廷ハ又英佛二國ノ後援ヲ得
テ澳露二國ガ洪加利及ビ波蘭土ノ亡命者ヲ渡
ノ要求ヲ拒絶シ遂ニ尼哥拉士一世ヲシテワノ
兵ヲプリエツト以北ニ退クルノ已ムヲ得ガル
ニ至ラシメタリ而シテ之ト同時ニ土廷ハ兵力
ヲ以テボスニ州民ノ新制度ニ反抗シテ乱
ヲ起セルヲ征服シ埃及ニ於テモ亦アバシ
ヤレノ頑冥ナル抵抗ヲ排シテ新制度ヲ承認セ
シメタリ勿論ツノ所謂ル改革ナル者ハ多クハ
紙上ノ空文ニ過キスニテ之ヲ実行スルコト極
メテ難ク基督教徒ハ猶ホツノ改革ヲ以テ不十
分ナリトナシ官吏ハ未ダ新法ニ慣レズニテ輒

モスレハツノ適用ヲ誤マリ回々教徒ハツノ教
義ニ違ヘリトシテ痛ク之ヲ厭ヒ新制度ト旧制
度トハ屢々衝突シテ人皆ツノ適從スル所ヲ知
ラズツノ混乱不規律ナルコト昔日ニ比シテ一
層ツノ甚カシキヲ加フルノ状ナシトセズ加フ
ルニ土國政府ノ財政ニ窮乏セル固ヨリ以テツ
ノ改革ニ必要ナル經費ヲ給スルコト能ハスト
虽ドモ而カモレシツト「バビヤ」ノ政策ハ積ムニ
歲月ノ久シキヲ以テスルトキハ亦能ク善良ノ
算算ヲ結ブノ望ナシトセズ是レ露帝ノ日夜憂
慮ニ勝ヘサル所ニシテツノ改革ノ未ダ成ラガ
ルニ之ヲ壞敗セシト欲シタル所以ナリトス但
カ露帝ハ一八九二年ノ始メニ至ルマデ中央政

羅巴ニ於ケル革命ノ變亂ト及ヒソノ外交上ノ
紛争トノ為メニ未ダ俄カニ土耳其ノ方面ヲ顧
ミルノ暇アラサリシト虽トモ今ヤソノ事件漸
ク收局ヲ告ゲテ中央歐羅巴ニ於テハ亦深ク顧
念スヘキ者アラサルヲ以テソノ全カヲ專ラハ
ルガニ半島ニ傾注シ以テソノ宿志ヲ果サンコ
トヲ期セリ

(三)

然レドモ露帝ハ敢テ直接ニ土國ニ攻撃ヲ加フ
ルコトナク窺カニ土領イリ、一邊隅モシ
テ子カロニ居住シタル基督教徒ヲ使喚シテ兵
ヲ起サシメノ因リテソノ騷亂ヲシテ施キテ歐羅
巴土耳其格全体ニ及ボサシメレコトヲ望メリ蓋

シモソテ子カロハ山間ニ僻在スル未開ノ一小
縣ニシテソノ住民ハ慍悍戰ヲ好ミソノ名ハ土
國ノ版圖ニ屬セリト言フト虽ドモソノ實ハ曾
テソノ政令ニ服従スルコトナクガラカカト
稱スル僧正アリテソノ地方ノ政ヲ專ラシニ而
シテソノ僧正ニハ代々ニゴツス家ノ系統ニ
屬スル者ヲ以テ之ニ任シ輓近ニ至リ聖彼得堡
ノ教主ヨリソノ任命ノ辞令ヲ受タルコト、ナ
リ事實ニ於テハ全ク露國ノ藩臣タルノ觀ヲ為
セリ最後ニ僧正ノ職ニ任シタルハソノ名ヲダ
ニロト稱シ露國ノ君臣ニ僖通セラレテ一八
五二年二月真個ノ君統ヲ創立スルニ決シソノ
政廳ノ宗門的組織ヲ一變シテ官衙的組織トナ

と自ら聖彼得堡に到りテ露帝に謁見し、露帝ハツノモシテ子タロニ君タルコトヲ公認しツノ身及ビツノ子孫ニ對シテ露國ノ援助ヲ与フベキヲ約シ金員勲章等ヲ與ヘテ國ニ還ラシメタリダニロリ既ニ露國ヨリ歸ルヤ直チニ土廷ニ叛キテ兵ヲ起シ土領ノ一市府ヲ攻メテ之ヲ陷レリ土廷ハ此ノ變報ヲ聞キテ大ニ驚キオノール、パシヤニニ三万四千ノ兵ヲ授ケ往キテダニロリヲ討タシノタリ既ニシテイリ、山間ニ於テ土兵トモシテ子タロノ兵トノ間ニ猛烈ナル戦アリ歐洲列國ハ皆ツノ戦報ニ接シテ大ニ震動シ就中英國ハイオニアニ群島及ビ希臘ニ近接シタル地方ニ於テ俄カニ戦乱ノ端

ヲ發シタルヲ視テ大ニ不安ノ念ヲ抱ケリ然レドモ歐洲列國中此ノ變報ヲ聞キテ憂懼措ク能ハサル者ハ蓋シ澳國ノ右ニ出ツルハナシ是レ他ナシ露國ガ土領内ノ「スラীগ」人種ヲ煽動シテ之ヲツノ指令ノ下ニ置クハツノノテニツヒノ時ニ於テスルトビエオールノ時ニ於テスルトニ論ナク澳國ノ忍ビテ看過スル所ニアラザレハナリ故ニ澳國政府ハ陽ハニ土廷ニ對スル「スラীগ」人種ノ要求ヲ援クルヲ名トシテツノ實ハ速ニバルカニ半島ニ於ケル革命的運動ヲ禁罷セシト欲シ一八五二年ノ終ニ至リ既ニ戦フテモシテ子タロニ克テ土廷ニ勸告スルニツノ復讐ノ念ヲ抑ヘテ務メテ寛大ノ措置ニ出

テ以テソノ領内ノ基督教徒ヲシテ更ニソノ不
平ヲ唱フルノ口實ヲ得セシムルナカラシコト
ヲ以テセリ

(四)

露帝ハ澳國ガ暗々裡ニソノ政策ニ反抗スルヲ
視テ心甚ク之ヲ悦ハズト雖ドモ而カモ之レガ
為メ敢テ深ク憂慮ヲ懷クコトアラサリキ他ナ
シ帝ハ澳國ガ到底永ク露國ト分離スル能ハサ
ルヲ察知シタレハナリ然レドモ他ノ方面ニ於
テ露國ニ反抗セシト欲スル一強國アリソノ決
心澳國ニ比スレハ一層固ク而シテソノ露國ノ
勢力ヲ怕ルコト亦敢テ澳國ノ如クナルニ至
ラスソノ國タル他ナシ佛國是ナリ蓋シ露國ノ

二國ハ是ヨリ先キ交々パレヌチノ又ニ放ケル
耶蘓ノ靈地ノ保護權ヲ獲ムコトヲ主張シソノ
爭論ハ當時ハ事体極メテ輕易ナルノ觀アリシ
モ日ヲ逐フテ漸ク重大ヲ加ヘ二國交々ソノ主
張ヲ固執シテ相下ラサルニ至レリ今ソノ事由
ヲ案スルニ仏國ガ往昔ヨリ該靈地及ビ之ニ奉
仕スル拉丁僧侶ヲ保護スルノ權利アルハ數多
ノ條約ニ徴シテ明白ナリト虽ドモ革命以後ハ
稍々ソノ權利ヲ行フコトヲ怠リシ為メパレシ
一又ニ居住シテ陰ニ露國ノ保護ヲ受ケタル希
臘僧侶ハ此ノ機ニ乘シテ漸ク仏國ノ保護權ヲ
侵蝕シ、ヲ以テ一八五〇年ニ至リ仏國政府ハ
此ノ事ニ執キテ抗議ヲ土廷ニ提出シタリ蓋シ

路易拿破侖ハ主トシテ羅馬教ノ援ヲ得テソ
ノ地位ヲナシタルヲ以テ同教ノ為メニ聊カ尽
ス所アラムト欲シ且ツ此ノ機ニ乘シテ從來衰
退ニ歸ミタル仏國ノ聲威ヲ東方ニ發揚セシト
欲シタルナリ土廷ハ固ヨリ此ノ如キ細微ノ事
件ノ為メニ露國ト讐ヲ啓コトヲ欲セヌト虽
トモ仏國ノ抗議モ亦之ヲ不問ニ附シ去ル能ハ
ズ實地ニ就キテ審カニ調査ヲ施コス可キヲ約
シ一年ヲ經テ一タビツノ調査ヲ終リタルモ露
國ヨリ異議ヲ提出シタルヲ以テ土廷ハ更ニワ
ノ再調査ニ着手セリ既ニシテ一八五一年十二
月ニ至リ路易拿破侖ハツノ内國ニ於テ「
テタ」ノ成功シ、カ為メ頓ニツノ勇氣ヲ加ヘ

土都^駐割ノ佛國全權公使ヲ、グレツトヲシテ嚴ニ
土廷ニ談スル所アラシメタルニ土廷ハ大ニ仏
國大使ノ辞色ヲ怖レ一八五二年二月九日ノ勅
令ヲ以テ更ニ仏國ノ權利ヲ確認シタリ然レド
モ露國ハ大ニソノ措置ヲ不當ナリト為シ仏國
大使ノツノ任所ニアラザルニ乘シテ更ニ土廷
ニ迫リ希臘僧侶ノ為メニ前キノ勅令ニ及ビタ
ル讓與ヲナサシメタリ是ニ於テラ、グレツトハ
ツノ任所ニ歸ルノ後テ痛ク土廷ノ不信ヲ詰責
シツノ希臘僧侶ニ與ハタル特權ヲ廢止セシメ
土廷ノ大臣中露國ニ好意ヲ表スル者數名ヲ罷
免シテ代フルニ佛國ニ親善ナル者ヲ以テセシ
メ且ツ土廷ニ向フテ佛國ト同盟ヲ結ブノ議ヲ

ト
務
省

提出シタリ而シテ之ト同時ニ土都駐劄ノ露國
大使ハカイナルシ及ボアレドリノールノ
條約ヲ援引シテ露帝ハ唯カニ土領内ニ住スル
若干ノ希臘僧侶ヲ保護スルノ權利アルノミナ
ラズ併セテ希臘教徒全体ヲ保護スルノ權利ア
リトナシ土廷ニ向フテ大ニ要求スル所アリ爰
ニ至リテ問題ハ單ニ拉丁僧侶ハ宜シク基督教
ノ靈地ヲ管理スベキ者ナリヤ將々希臘僧侶ハ
宜シクソノ神壇ニ燈火ヲ献シ読經ヲ捧クベキ
者ナリヤ否ヤヲ決スルニ存セズシテ露佛二國
ノ勢力ノ抗争トナリ露國ハ宗教ヲ名トシテソノ
制令ヲ東方ニ施サント計リ佛國ハカノテ露國
ノ勢力ヲ抑ヘテソノ志ヲ逞クセシムル無ラム

コトヲ欲シタリ

(五)

是ヨリ先キ露帝尼古拉士一世ハ大ニ仏國ニ於
ケル「^ル」^ル、デター」ノ舉ヲ稱賛セリト虽ドモ之ヲ
実行セル路易拿破侖烈翁ツノ人ニ對シテハ絶エ
テ好意ヲ表スルヲ欲セズ帝ハ一時拿破侖烈翁ヲ
以テソノ反動政策ヲ行フノ方便ヲラシムベシ
ト思料セリト虽ドモソノ拿破侖烈翁ノ名トソノ
革命ニ由リテ起リタル過去ノ經歷トニ顧ミテ
ソノ永ク歐洲ノ君主國ニ平和ヲ與フル者ニア
ラサルヲ慮カリ敢テ之ニソノ心ヲ許スコト能
ハズ既ニシテ拿破侖烈翁カ東方ニ於テ露帝ノ政
策ニ反抗セシトスルヤ帝ノ之ヲ憎ムノ念ハ益

ワノ深キヲ加ヘ百方手段ヲ運ラシテワノ勢力
ヲ抑ヘムト欲シ拿破破烈翁カツクテ、デターノ
功ヲ奏シタル後更ニ帝位ニ即カムコトヲ志シ
日夜之レガ準備ヲ怠ラサルヲ視テ之ヲシテワ
ノ志ヲ逞クセシムル無カラムト欲スルモワノ
獨力ノ能クスル所ニアラサルヲ慮カリ一八五
二年五月維納及ヒ伯林ニ赴キテ澳帝及ヒ普王
ニ會見シ拿破破烈翁カ一八一五年ノ條約ニ背キテ
帝位ニ登ラムトスルヲ制止スルノ措置ニ就キ
テ協議スル所アリシガ當時澳普二國ノ交情相
善カラサルガ為メ露帝ノ懷抱セル連合策ハ遂
ニワノ成ルヲ告グルニ至ラズ是ニ於テ路易拿
破烈翁ハ大ニワノ意ヲ強クシテワノ帝政ヲ復

立スルノ意アルコトヲ忌憚ナク世上ニ発表シ
一八五二年九月十月ノ交ニ佛國ノ北部及ヒ南部
ヲ巡回シテ到ル所ニ演説ヲ為シワノ帝位ニ即
ケルカ為メニ歐洲列國ノ安寧ヲ擾カスノ患ナ
キヲ辯明シ自ラ稱ヒテ帝政ハ則チ平和ナリト
言ヘリ既ニシテ舉國投票ノ結果ニ因リテ十二
月一日元老院ニ於テ拿破破烈翁ヲ帝位ニ冊立シ
タルノ日ニ彼レハ再ビ同一ノ意思ヲ説明シ前
政府ノ負擔シタル義務ハ都々之ヲ継紹シワ
ノ訂結セル諸條約ハ都々之ヲ履行スヘキヲ
宣言シワノ翌日外務大臣ドルーアニ、ド、リユー
ハ更ニ歐洲列國ニ公文ヲ送りテ拿破破烈翁三世
ノ政策ハワノ帝位ニ即キシ後ト雖ドモワノ大

統領タリレ時ト一モ異ナルコトナキヲ以テフ
ノ即位ハ益々歐洲列國ノ平和ヲ保障スル者タ
ルコトヲ告ケリ
夫レ此ノ如ク佛國政府ハ歐洲列國ノ自國ニ對
スル危惧心ヲ除クニ百方ツノ力ヲ竭セリト虽
ドモ露帝尼哥拉士一世ノ如ク今尚ホ神聖同盟
ノ旨義ヲ懷抱セル諸君主ハ佛國ノ新帝カソノ
妄リニ歐洲ノ安寧ヲ擾ダサ、ルコトヲ誓約シ
タルニ拘ハラスツノ必ズ一八一五年ニ於テ佛
國ノ被ムリタル屈辱ヲ回憶シ時機ヲ窺フテ之
ヲ雪ガムト欲スルノ意アルベキヲ慮カリ且ツ
ツノ由リテ以テ帝冠ヲ得タル民主權及ビ舉國
投票ヲ引援シテ常ニツノ辭ヲナスヲ視テ容易

クツノ言フ所ニ信ヲ措クコトヲ欲セズ就中露
帝ハ仏國ニ於ケル第二帝國ノ設立ヲ妨グルコ
ト能ハサリシヲ憾ミ君主制ノ諸旧國ヲ糾合シ
テ仏國ノ勢力ヲ抑、ツノ帝政ニ公認ヲ與フル
コトヲ峻拒シ且ツ相俱ニ警戒ヲ嚴ニシテツノ
侵寇ニ備ヘムコトヲ望ノリ
露帝ノ警戒ハ就中普國ニ於テ大ニツノ反響ヲ
生シ普王フレデリック、ギール、オーム、四世ハ仏國
ヲ懼ル、コト益々甚シク仏軍ノ来リテツノ國
境ヲ侵カスハ必ズ近キニ在ルベシト思料シツ
ノ混乱錯綜セル精神ハ種々ノ方策ヲ描キ出ガ
シ由リテ以テツノ視テ仏帝ノ謀圖ナリトナセ
ル者ヲ排除セムト欲シ十一月下旬ニ至リ王ハ

一八一四年及一八一五年ノ四國同盟ヲ再訂
シ、仏國ヲシテ拿破侖一世ノ滅亡後歐洲列國
ノ協約ヲ以テ限定シタル經界ノ外ニ出ツルコ
ト能ハサラズシムコトヲ計リツノ後數日ヲ經
テ王ハ更ニ仏國ガ自耳義ヲ侵サレト欲スルノ
意アリト思料シ之ヲ防禦スルカ為メ英吉利和
蘭、自耳義ノ三國ヲ連ネテ普國ト俱ニ同盟ヲ結
ハシコトヲ企ケテタリ然レドモ王ノ此等ノ方
策ハ露帝ノ方策ト齊シク英國政府ノ協替ヲ得
ルコト能ハサルガ為メ遂ニツノ実行ヲ視ルニ
至ラズ蓋シ當時ニ於テ苟モ仏國ニ反對スル同
盟ヲ組成セムト欲セバ必ズ英國政府ハ當時
東方ニ於テ頗ル不穩ノ形勢ヲ呈シタルヲ視テ

專ラ露國ニ對シテ拿破侖モ亦英國ヲ引キテ
同盟トナサシムト欲スルノ意アリ故ニ拿破侖
ハ英國政府ニ向ヒツノ決シテ自耳義ヲ侵スコ
コトナカルベキヲ約シタルハ英國政府ハ大ニ
ツノ意ヲ安シシ十二月六日他國ニ率先シテ拿
破烈翁ノ帝號ヲ承諾公認シ次テ歐洲ノ二等國
ハ相引イテツノ例ニ倣ハリ是ニ至リテ露普ノ
二國ハ何カニ仏國ヲ敵視スルモ遂ニ之ヲ奈何
トモスルコト能ハス况レヤ澳國ハ勃奈巴爾篤
家ヲ増ムコト極メテ深クツノ口ヲ民主權ニ籍
リテ歐洲ノ旧國ヲ凌ガレトスルヲ視テ心甚ク
之ヲ喜バズト虽トモ一朝ハユイ河畔ニ於
テ露帝ト衡ヲ争フニ方リテハ必ズ援ヲ仏帝ニ

ト
卷
省

仰かガルベカラサルヲ慮カリ敢テ之ニ對シテ
公然敵意ヲ表スルヲ欲セズ而シテ普王フレデ
リツク、ギーオームモ亦澳帝フラレソヤ、ジヨ
セフカ到底已レト事ヲ俱ニスルノ意ナキヲ察
シ獨リ危険ヲ冒カシテ釁ヲ仏國ニ構フル能ハ
ズ事情此ノ如クナルヲ以テ露帝ハ結局澳普二
國ヲシテソノ能ク神聖同盟ノ趣旨ヲ体シテ違
戾スルナキヲ証明スルガ為メ露帝ノ拿破烈翁
三世ノ帝號ヲ公認スルニ至ルマデ亦必ス之ヲ
公認セザル旨ヲ約セシメタルノ外竟ニ一モ得
ル所アラザリキ然ルニ日耳曼聯邦ノ二等國ハ
一方ニハ拿破烈翁三世ノ脅迫スル所トナリ他
方ニハ仏國ノ援ヲ得テ澳普二國ノ勢力ニ反抗

セシト欲シ今ヤ將サニ二國ヨリ分離シテ各自
仏國ノ帝政ヲ公認セシトスルノ状アルヲ以テ
澳普二國モ亦晏然トシテ久シク露帝ノ公認ヲ
願フルヲ待ツコト能ハズ是ニ於テ露帝モ亦一
八五三年一月初旬ヲ以テ遂ニ拿破烈翁三世ノ
帝号ヲ公認セリト雖トモソノ拿破烈翁三世ニ
送レル書中ニ於テ故ラニ不遜ノ言辞ヲ使用シ
之ニ告グルルニソノ能ク一八一五年ノ條約ニ規
定シタル義務ヲ遵守シテ違フコト無カルベキ
ヲ以テシ且ツ通常列國君主間ノ稱呼ニハ兄弟
ノ辭ヲ用フルノ慣例アルニ拘ハラズ露帝ノ書
中ニ於テハ拿破烈翁ヲ呼ブニ單ニ明友ノ辭ヲ
以テシタルニ過ギス而シテ佛國外務大臣ドル

ト
務
省

一ア、ド、リ、ユ、イ、一、カ、此、事、ニ、就、キ、テ、説、明、ヲ、露、國、
大、使、キ、セ、レ、ツ、フ、ニ、求、ム、ル、ヤ、大、使、ハ、露、帝、ガ、由、リ、
テ、以、テ、ソ、ノ、國、ヲ、統、治、ス、ル、所、ノ、旨、義、ハ、之、ヲ、之、テ、
他、ノ、旨、義、即、チ、國、民、ノ、主、權、ニ、本、キ、テ、ソ、ノ、權、利、ヲ、
保、有、ス、ル、君、主、ヲ、兄、弟、ト、視、做、ス、コ、ト、ヲ、得、セ、シ、メ、
ス、ト、宣、言、シ、露、帝、ノ、仁、帝、ニ、對、ス、ル、不、遜、ノ、言、動、ハ、
之、ニ、由、リ、テ、益、々、ソ、ノ、劇、甚、ク、加、ヘ、拿、破、烈、翁、ハ、痛、
ク、露、帝、ノ、無、禮、ヲ、憤、ホ、リ、尔、來、帝、ニ、時、機、ノ、至、ル、ヲ、
待、テ、ソ、ノ、怨、ヲ、報、セ、レ、コ、ト、ヲ、計、レ、リ、既、ニ、シ、テ、澳、
普、ノ、二、國、モ、亦、拿、破、烈、翁、ノ、帝、號、ヲ、公、認、シ、而、シ、テ、
ソ、ノ、辭、令、ハ、露、帝、ノ、書、ニ、比、シ、テ、頗、ブ、ル、敬、禮、ヲ、尽、
ク、セ、リ、ト、虽、ド、モ、拿、破、烈、翁、ノ、保、有、シ、タ、ル、政、權、ノ、
起、原、ニ、就、キ、テ、ハ、亦、齊、シ、ク、冷、淡、ノ、意、ヲ、示、シ、且、ツ、

ソ、ノ、維、納、會、議、ニ、於、テ、定、メ、タ、ル、仁、國、ノ、疆、界、ヲ、維、
持、ス、ル、ノ、須、要、ナ、ル、ヲ、切、言、セ、ル、ノ、故、ニ、由、リ、亦、大、
ニ、拿、破、烈、翁、ノ、感、情、ヲ、害、シ、タ、リ、要、ス、ル、ニ、君、主、制、
ノ、旧、國、中、英、國、ヲ、除、ク、ノ、外、ハ、皆、均、シ、ク、拿、破、烈、翁、
ヲ、待、ツ、ニ、真、個、ノ、帝、者、ヲ、待、ツ、ノ、道、ヲ、以、テ、セ、ズ、大、
ニ、之、ニ、輕、侮、ノ、意、ヲ、示、シ、孰、シ、ノ、王、室、ト、虽、ト、モ、之、
ト、俱、ニ、姻、戚、ヲ、連、ヌ、ル、ヲ、肯、ム、セ、ズ、而、シ、テ、拿、破、烈、
翁、モ、亦、ソ、ノ、然、ル、ヲ、察、シ、既、ニ、帝、号、ヲ、稱、ス、ル、ノ、後、
王、家、ノ、出、身、ニ、ア、ラ、ガ、ル、西、班、牙、ノ、一、貴、女、ヲ、容、レ、
テ、ソ、ノ、后、妃、ト、ナ、セ、リ、憶、フ、ニ、拿、破、烈、翁、ハ、之、ヲ、機、
ト、シ、テ、ソ、ノ、始、メ、身、ヲ、民、主、党、ヨ、リ、起、シ、テ、今、尚、ホ、
當、初、ノ、旨、義、ヲ、捨、テ、ズ、必、ズ、シ、モ、ソ、ノ、身、ニ、冷、淡、ナ、
ル、諸、國、ノ、王、室、ニ、對、シ、テ、ソ、ノ、歡、心、ヲ、買、フ、ノ、意、ナ、

キコトヲ明カニセシト欲シタルナラム且ツ拿
破烈翁ハ若シ能ク人目ヲ驚カスベキ一大殊功
ヲ樹テ以テ諸國ノ王室ヲ強制スルニアラズ
ハ永クツノ輕侮スル所トナリソノ擯斥スル所
トナリテ之ト相伍スルコト能ハサルヲ知レリ
後日彼レノ使節ガビスマルクニ語レルカ如ク
彼レハ戦争ノ必要ヲ有セリ彼レハ仏國民ノ反
抗ノ氣燄ヲ外ニ洩ラシ歐洲列國ヲシテツノ威
風ニ懼伏セシムルカ為ノ必ズ一たび戦ヲ開カ
サルベカラス而シテ彼レガ冒險ヲ事トシテ功
名ヲ好メル亦決シテ戦ヲ懼ル者ニアラス

(六)

然レドモ第二帝國ガ既ニ列國ノ公認ヲ得タル

ノ後チ外交社界ノ人心ハ漸ク靜穩ニ復シ復々
永ク歐洲一般ノ平和ヲ攪乱セラルルノ恐ナキ
ヲ信スルニ至レリ
是ノ時ニ方リ澳普二國ハ佛國ニ於テ武断政ノ
勃興セルヲ視テ澳ハ日耳曼ニ於テ再ビ革命ノ
憂乱ヲ生セシコトヲ恐レ普ハブリストト及ビプ
ラオルテレノ各部分立論ノ勝ヲ奏セシコトヲ
恐レ加フルニ露帝ノ荐リニ二國ノ間ヲ調停セ
ルカ為メ二國ハ經濟上ノ問題ニ関シテ交々讓歩
スル所アリ以テ漸ク相親コレトスル状ヲ呈シ
一八五二年十二月澳帝ハ普王ト伯林ニ會見シ
次テツノ翌一八五三年二月十六日澳普ノ間ニ
通商條約ヲ訂結シ普國ハ澳國ニ讓ルニ些少ノ

ト
啓
首

利益ヲ以テ之、澳國ハソノ「ガルゲエ」同盟
ニ加入スルノ要求ヲ他日ニ譲リ由リテ以テ一
時日耳曼ノ平和ヲ保維スルヲ得タリ
之ト同時ニ澳國政府ハ東方ニ放テ頗ル果斷ナ
ル措置ヲ施コシ由リテ以テモシテ子ガロニ関
スル至難ノ問題決スルヲ得タリ是ヨリ先キ澳
國政府ハ露國ガバルガニ半島ノ事ニ干涉シツ
ノ騷亂ヲ鎮スルヲ名トシテソノ實ハ益々之ヲ
煽動スルヲ視テ大ニ之ヲ憂懼シ一八五三年一
月レインニシテ伯ヲ特使トシテ君士坦丁堡ニ
ニ派遣シ土帝ニ説クニ急ニイリ、ノ乱ヲ戡
定スヘキヲ以テセシメタリレインニシテ伯既
ニ君士坦丁堡ニ到リ土廷ガホスニ一ノ人及ビモ

レテ子ガロ人ニ對シテ忘リニ殘虐ヲ加フルヲ
止メ姑ク旧來ノ状態ヲ維持シテ變スルコトナ
ク且ツ騷亂ノ為メニ損害ヲ被ムリタル土領内
ノ基督教徒ヲ保護シテ之ニ賠償ヲ與ヘムコト
ヲ土廷ニ要求シ辞色ヲ勵クニテ之ヲ脅カシタ
ルニ土廷ハ大ニ伯ノ言ヲ怕レ談判十五日ニ亘
レルノチ遂ニ悉ク伯ノ要求ヲ容レ二月十四日
伯ハソノ土廷ト俱ニ協定シ、結果ヲ齎ラシテ
維納ニ歸リタリ
此ノ他前キニ露佛ノ間ニ起リタル基督教ノ靈地
ニ関スル問題モ亦平和ノ間ニソノ決定ヲ見ル
ノ望ミナキアラズ蓋シ仏國政府ハ固ヨリ露國
ト爭ヲ構フルヲ恐ル、者ニアラズト虽トモ我

ト
務
省

ヨリ強イテ争ヲ挑ミタルノ形迹ヲ示スヲ欲セ
ル故ニパレスチーヌニ於ケル自國ノ權利ノ既
ニ土廷ノ為メニ確認セラレタルノ後土廷ガ露
帝ノ保護セル希臘僧侶ニ對シテ若干ノ要求ヲ
容ルコトヲ諾シ且ツ土都駐劄ノ仏國大使ワ
レツトノ暴慢ナル態度ニ由リ痛ク露國ノ感情
ヲ害シタルヲ悔ヒテ之ヲツノ本國ニ召還シ而
シテ之ト同時ニ露廷ニ向ヒテパレスチーヌノ
靈地ニ関スル談判ヲ聖彼得堡ニ於テ開カムコ
トヲ求メタルニ露廷モ亦喜ビテツノ求メニ應ジ
タリ爭態既ニ此ノ如ク當時世人ガ露仏間ノ紛
争ノ日ナラズシテツノ收局ヲ告グルニ至ルベ
キヲ信シタルハ故ナキニアラズ

(七)

然レドモ露帝ハ此ノ時ヲ以テ遽カニ積年ノ秘
計ヲ暴露シ大ニ歐洲列國ノ心膽ヲ寒カラシメ
タリ今ツノ次第ヲ記述セムニ一八五三年二月
十日露國海軍提督メレケコツプ公ハ露帝ノ密
旨ヲ受ケ特派大使トシテ君士坦丁堡ニ赴キシ
カ人アリ若シ露廷ニ問フニメレケコツプノ使
命ノ何事ナルカラ以テスレハ露廷ハ之ニ答ヘ
テツノ齋ラセル訓令ハ唯カモレテ子グロ及び
基督ノ靈地ニ関スル問題ヲ決定スルニ外ナラ
ズト言ヘリ然レトモ當時十五万ノ露兵ハプリ
エツト河濱ニ屯シ黑海ニ在ル露國ノ艦隊モ亦
盛ムニ戰備ヲ修メ以テ露廷ノ言ノ信ヲ措クニ

ト
露
省

足ラサルヲ表彰セリ蓋シノレチコツフノ真個
ノ使命ハ土帝ニ向ヒテツノ國ヲ露國ノ保護ノ
下ニ置カムコトヲ迫リ日數ヲ限リテツノ決答
ヲ促カシ仍テツノ聽カサルヲ名トシテ開戦ノ
辞柄ヲ設クルニ在リキ
抑モ露帝ガ此ノ時ニ於テ遽カニ此ノ如キ大胆
ノ措置ヲ事トスルニ至リタルハ亦必ゾツノ故
ナクムバアラズ蓋シ帝ハ疾ヲヨリシテ澳普二
國カ露國ニ對シテ好意的中立ヲ守ルベキヲ期
セリ而モ猶ホツノ久シク狐疑躊躇シテツノ企
圖ヲ断行スルヲ敢テセザルハ一ニ英國ノ反對
ヲ慮カリシガ故ノミツノ仁國ト葛藤ヲ醸スハ
初メヨリ帝ノ恐ル、所ニアラズ然レドモ更ニ

英國ノ之ヲ援クルコトアラバ帝モ亦輕クシテ事
ヲ擧クルコト能ハズ然ルニ一八九三年ノ始メ
ニ方リ帝ハ英國ガ帝ガニツノ企圖ヲ妨害セガ
ルノミナラズ適ク帝ヲ援ケテツノ志ヲ遂ゲシ
ムルノ望アルヲ信ズルニ至レリ蓋シ英國ニ於
テハ一八九二年十二月ヲ以テデルビー内閣ヲ
ノ職ヲ罷ノラレ之ニ代レル新内閣ハ異種異類
ノ人物ノ混合ヨリ成リ中ニハバルノルスト
及ビジョレラツセルノ如キ專ラ露國ノ野心
ヲ抑ヘレコトヲ主張スル者ナキニアラズト雖
ドモ彼等ハ概子内閣ニ於テ重要ノ地位ヲ有セ
ズ而シテ新々ニ外務ノ局ニ當レルクセラレド
卿ハツノ同僚ガラツドストーレノ輩ト俱ニ絶

對的ノ平和論者ナリ加フルニ新内閣ノ首相ア
ベルギーニ御ハ平素露帝ニ親交アリテ亦固ヨ
リ露國ト譽ヲ啓クヲ欲セズ且ツ數年來英國ノ
輿論ハ痛ク主戰說ヲ排斥スルノ傾向アリテ女
王ヴィクトリア及ビ王婿アルバート親王ハ亦
拿破破烈翁三世ニ對シテ同情ヲ寄スル者ニアラ
ズ事情此ノ如クナレテ露帝ハ誤謬ノ通信
ヲ信シテ英仏同盟ハ必然成立スル能ハサル者
ナリト思料シタリ
且ツ露帝ハ百方手段ヲ竭クシテ英國ノ歡心ヲ
收メシト欲シ一八九三年一月ノ交ソノ特派
大使メシチコツフガ既ニ露都ヲ彙シテ將サニ
君士坦丁堡ニ達セムトスルノ時ニ際シ英國ニ

向フテ一種ノ提議ヲ爲シ而シテツノ提議ハツ
ノ能ク行ハルト否トニ論ナク必スツノ企圖
ノ実行ヲ容易ナラシムヤキ者ナリト思料シタ
リ帝ハ露都駐劄ノ英國大使ハミルトセームル
トノ談話中土耳其帝國ヲ垂死ノ病人ナリト稱
シ仍テ相俱ニツノ遺産ノ相続ニ関スル協定ヲ
遂ゲムコトヲ告ゲリツノ言ニ云ク「吾等ハ今吾
等ノ眼前ニ極メテ危篤ナル病者ヲ有セリ彼レ
若シ吾等が未ダ必要ノ処分ヲ定メザルニ及ビ
テ吾等ノ手ヨリ逸スルコトアラバ不幸是ヨリ
大ナルハナケムトセームル答ヘテ云ク「能ク
コノ病者ヲ救護スルハ慈仁ニシテ強健ナル人
ノ任ナリト然レドモ露帝ハ屢次同一ノ話題ニ

颯 而エテ言ノ之ニ及ブゴトニ漸クツノ真意ヲ
露セリ彼レツノ始ノハツノ心ニ欲セサル所ヲ
言セ後チ漸クツノ欲スル所ヲ言ヒ遂ニ自ラ土
耳格分割ノ方策ヲ定メテモルタガイ、ワラニ
セルビ、及ビ勃牙利ヲ露國ノ有トナシ埃及及
ビカニチ、イ、ヲ英國ニ歸スルノ極メテ妥當ノ處
分ナルヲ語シ若シ夫レ君士坦丁堡ニ至リテ
ハ帝ハ孰レノ國ニ論ナク之ヲ領有スルノ不可
ナルヲ認メリト虽トモ暗ニツノ地ノ久シカラ
ズエテ自己ノ管理ニ歸スベキヲ示シタリ

(八)

此ノ間ニ於テメレチコツフハ土耳其格ニ達シタ
リ然レドモ露帝ハ更ニ英國ノ意向ノ何ノ邊ニ

アルカラ確メタル後チニアラズバ之ニ与ヘ
タル訓令ノ趣旨ヲ世上ニ洩ラスヲ欲セズ以爲
ヘラク英國若シツノ意見ニ賛同セバ即時ニ病
者ノ死ヲ促カヌコトヲ得、ハク若シ或ハ之ニ援
ヲ與フルヲ拒マバ露國ノ獨カラ以テ事ニ方リ
直接ニ土帝ニ談判シテ以テ東方ノ關鍵ヲツノ
掌中ニ收ムルモ亦敢テ不可ナリトセズ此ノ如
クナルトキハ英國政府ハ露國ノ甘言ニ欺カレ
テツノ計全ク成ルニ至ルマテ毫モ疑念ヲ生ス
ルコトナク而シテツノ計全ク成リテ土廷既ニ露
國ノ藩屬トナレルノチ英國始メテツノ欺カレ
タルヲ悟リテ抗議ヲ提出スルコトアルモツノ
時機既ニ晚シテ復タ之ヲ奈何トモスルコト能

ト
第

ハサレハシト露帝ノソノ心ニ期スル所此ノ如
シ然レドモ事實ハ全ク帝ノ期望ニ伴フコト能
ハサリキ
英國政府ハ云フマデモナク露帝ノ提議ヲ拒ル
土耳格果ニテ痛メリトセバ宜シク之ヲ療医ス
ルノ術ヲ尽クスベシト答ヘ遂ニソノ談判ヲ中
止ニタリ既ニシテ露帝ト英國大使セームール
トノ談話ハ露帝ノ企圖ニ就キテ頃ニ世上ノ警
戒ヲ促カシム國政府亦之ヲ謀知シテ帝ノ土耳
格ヲ亡ホスノ企アルヲ察シ露帝ニ向ヒ大ニ詰
問スル所アリ露廷ハ尚ホ百方言ヲ構ヘテソノ
メレテコソツフニ與ヘタル秘密ノ訓令ヲ隱蔽セ
ムコトヲ試ミタルモノシテコソツフガ土廷ニ對

スル態度ト土廷ノ諸大臣ノソノ秘密ヲ洩ラヌ
ヲ憚カラサリシトノ為メ露廷ノ企圖ハ日ナラ
ズシテ明カニ世間ニ暴露スルニ至レリ是レヨ
リ先キメレシテコソツフハ二月二十八日ヲ以テ君
士坦丁堡ニ入りシガソノ行装ノ壯ナル恰モ戰
勝者ノ征服地ニ入り乘レルモノ、如ク越テ數
日彼レハ土國外務大臣フエアード、エフエレケ
ーヲ以テ露國ヲ敵視スルモノナリト為シ土廷
ニ向ヒソノ職ヲ罷メムレコトヲ要求シ、ニ當
時英仏ノ大使ハ俱ニ土都ニ在ラガリシヲ以テ
土帝ハ容易クメレシテコソツフノ要求ニ應ジテソ
ノ外務大臣ヲ罷免シタリ下旬ニ至リ土廷ノ諸
大臣ハメレシテコソツフヨリ提出シタル協商ノ條

ト
務
省

件ヲ密カニ英仏二国ノ代理公使ニ示シタルガ
ツノ要旨ハ露土ノ間ニ永久ノ同盟ヲ結ビ而シ
テ土帝ハ露帝ヲ以テ土領内ニ於ケル希臘教ノ
正當ナル保護者タルコトヲ認メ以テツノ同盟
ニ報フベシト言フニアリ然ルニ希臘教ノ首長
等ハ宗教以外ニ廣大ナル権カヲ有シ土領内ニ
於テ千二百万乃至千五百万ノ人民ヲ統率セル
ヲ以テ土帝果シテ露帝ノ要求ヲ容ル、トキハ
是レ恰モ自己ノ主權ヲ拋棄スルニ均シキナリ
其ノ後チ數日ヲ経テ土廷ノ君臣ガ日夜ツノ到
ルヲ待チシ仏国大使ド、ラ、ク、ール及ビ英国大使
ストラトフオールド、ド、レトクリツフハ俱ニ君士
坦丁堡ニ達シ而シテ各々ツノ本國政府ノ訓令

ニ本キ協同シテ事ニ従フヘキヲ約シ詳カニ當
時ノ状勢ヲ視察シテ巧慧ナル一種ノ方略ヲ協
定シタリ彼等ハ既ニ露使ノシテコツフヨリ土
廷ニ要求シ、條件ヲ知レリト虽トモ伴リテ之
ヲ知ラサル為子シメシチコツフノ露都ニ來レ
ルハツノ陽ハニ声言セルガ如ク專ラモシテ子
ガ口及ビ基督ノ靈地ニ関シテ談判ヲ遂ケルガ
為ノナリト信スルノ状ヲ粧ヒ仍テ速カニ右ノ
二個所ニ関スル論争ノ局ヲ結ビ露使ヲ以テツ
ノ土廷ニ責ムルノ口実ヲ得セシムルナカラシ
コトヲ計レリ然ルニモシテ子ガ口事件ハ是ヨ
リ先キ澳國ノ斡施ニ由リテ既ニ之ヲ決定シタ
ルヲ以テ露國ハ再ビ該問題ヲ提起スルノ要ナ

ト
務
省

ク而シテ靈地事件ニ就キテハ英國大使ヨリ
國ニ勸告シテ露國ノ為ニ極メテ便益ナル協
定ヲ遂ゲ五月四日ヲ以テ全クツノ局ヲ結ブ
得タリ是ニ至リテメレチコツフハ宜シク速カ
ニ去リテツノ國ニ還ラザルヘカラス然ラズ
ハ宜シクツノ假面ヲ脱シテツノ真相ヲ現ハ
以テツノ曲ノ明カニ露廷ニ在ルコトヲ自白セ
ザルヘカラス是ノ時ニ方リテ露帝ハ日ニツノ
倨傲ノ心ヲ加ヘ英仏二國ニ欺カレテ陷穽ニ落
ツルヲ察セスレテツノ企メ必ズ功ヲ奏スベキ
ヲ信シ英國トノ秘密談判ノ已ニ不調ニ歸シテ
復タ之ニ望ヲ屬スヘキ者アラザルヲ以テ乃チ
令ヲメレチコツフニ傳ヘテ從來秘密ニ附シク

ル條件ヲ公ニシ土帝ニ迫リテ速カニツノ要求
ヲ容レシコトヲ促カシ英仏二國ヲシテ卒然之
ヲ聞知シテ相俱ニツノ協商ヲ遂ガルノ暇ナカ
ラシメレト欲シ而シテ英仏二國カ夙トニツノ
要求ノ條件ヲ探知シテ土廷ノ諸大臣ト俱ニ豫
シメ之ニ備フルノ計ヲ定メタルヲ知ラズ故ニ
メレチコツフハ五月五日ヲ以テツノ言辭倨傲
ヲ極メタル最後ノ要求書ヲ土廷ニ送り五日間
ヲ期シテ希臘教ノ為ニニ宗教上ノ自由ト政治
上ノ特權トヲ担保スヘキ條約ヲ露土ノ間ニ訂
結スルヲ承諾スルヤ否ヤヲ答フ可キヲ告ゲ而
シテ土廷若シ之ヲ承諾スル能ハズト答フルト
キハメレチコツフハ露帝ノ命ニ依リテ即時ニ

ト
務
省

君士坦丁堡ヲ去リ露帝ハ別ニツノ要求ヲ貫ク
ノ手段ニ出ツルコトアルベシト言ヘリ
然レドモ土國政府ハ英仏二國カ必ス之ヲ捨ツ
ルコトナカルベキヲ約ミタルヲ以テツノ抵抗
ノ決心ヲ固クシ五月十日露使ニ向ヒテ苟モ独
立ノ主權ヲ抛棄スルニアラズムハ條約ニ由リ
テツノ内政ノ監督ヲ外國ニ托スルコト能ハズ
ト答ヘ且ツ英仏二國ノ勸告ニ本キ一ノ勅令ヲ
發シテツノ臣民ノ為ニ十分ニ宗教ノ自由ヲ
保障スベキヲ告ゲリ然レドモ是レ唯ツノ主
權ノ作用ニ出ツル者ニシテ決シテ之レカ為ノ
ニ他國ト約スル所アリテツノ強制ヲ受ケテ然
ルニアラズ况ニヤ希臘教ニ賜與スベキ政治上

ノ特權ニ關シテ露國ト俱ニ條約ヲ訂結スルヲ
ヤツノ承諾ヲ與フルコト能ハサルヤ言ヲ竣タ
タス
ノレチコツフハ更ニ土廷ニ向ヒテ大ニ抗論ス
ル所アリ遂ニ之ニ迫リテツノ總理大臣及ビ外
務大臣ヲ免黜セシメタリ然レドモ彼レハ之レ
カ為メ一モ得ル所ナク平生露國ノ政策ニ最モ
敵意ヲ表シタルレシツト「パニヤ」ハ新々ニ外
務大臣トナレリ既ニシテメレチコツフハ少シ
クツノ声色ヲ和ゲ始メニ提出シタル條約訂詰
ノ議ヲ撤回シ唯カ土廷ヨリ一ノ公文ヲ露廷ニ
送り以テ露廷ノ要求セル約束ヲ為サムコトヲ
求メリ然レトモツノ起草ニタル公文ノ趣旨ハ

ト
條
旨

一モ土廷ニ和スル所アルニアラス故ニ新外務
大臣ハ之ヲ斥ケテ更ニツノ趣旨全ク之ト反對
シ務メテ土帝ノ獨立トツノ主權トヲ保留スベ
キ公文案ヲ草シ五月二十日之ヲメレケコツフ
ニ示シタリ是ニ於テメレケコツフハ斷然ツノ
談判ヲ中止シツノ翌日彼レハ始メ平服ヲ纏フ
テ來リタルモ不日更ニ軍服ヲ穿ケテ來ルベキ
ヲ揚言シ昂然トシテ土都ヲ去レリ既ニシテ露
國外務大臣子ツセルロドハメレケコツフノ
土都ヲ去リタルノ報ニ接シ五月三十一日更ニ
露帝ノ名ヲ以テ土廷ニ最後ノ促答狀ヲ送りメ
レケコツフノ提出セル公文ヲ送ルコトヲ承諾
セムコトヲ要求シ土帝若シ八日以内ニツノ承

諾ヲ與ヘザルトキハ露帝ハ先ツモルタウイト
及ビヴラシノ二州ヲ占領スベキヲ告ゲ更ニ
六月十一日ヲ以テ子ツセルロドハ露國ノ外
交官全体ニ一通ノ告諭ヲ發シテ露帝ハ萬止ム
ヲ得ザル理由ノ為メニ遂ニ此ノ重大ナル決心
ヲ為スニ至リタルヲ告ゲリ

(九)

歐洲列國ハ露國ノ狀態ヲ視テ大ニ震駭シ純中
英國ニ於テハ露帝カ久之ヲ英政府ト協同シテ
事ニ從フノ風ヲ粧ヒ其ノメレケコツフニ授ケ
タル使命ノ真旨ヲ隱蔽シ其ノ紳士ノ体面ニ掛
ケテ苟モ英政府ト協商ヲ遂ゲタル後ニアラズ
ニバ東方事件ニ就キテ何カナル決定ヲモナサ

ト
務
省

ハル可キヲ約シタルヲ以テツノ國人ノ憤激ハ
一層ツノ甚カシキヲ加ヘタリ然レドモ事既ニ
此ニ至リテ徒ラニ口舌ヲ以テ露國ヲ詰責スル
モ固ヨリツノ益アラサルヲ以テ唯カ速カニ突
カヲ以テ之ト争ツノ備ヲ為サ、ルバカラズ此
ノ時ニ方リ英仏二國ノ交情ハ日々逐フテ益々
ツノ親密ヲ加ヘ六月一日ヨリ三日ニ至ルノ間
ニ二國ハツノ艦隊ヲ如ルカ子ール海峡ノ附近
ニカ湾ニ派遣シ土廷ノ請求ニ應ヒテ即時ニ
海峡ニ進入スルノ備ヲ為シツノ後々數日ヲ經
テ土帝ハ一ノ勅令ヲ發シテ土耳其帝國內ニ於
ケル宗教ノ自由ヲ保障シ以テツノ領内ノ基督
教徒ヲ虐遇セサルノ実ヲ示シ而シテ之ト同時

ニ佛國外務大臣ハ一八四一年ノ條約ニ本キ五
大強國相合シテ一ノ會議ヲ開キ以テ東方ノ危
機ヲ收結セシコトヲ提議シタリ
露帝ハ英仏二國ノ艦隊ノマヅカ湾ニ入レルヲ
聞キテ大ニ怒リツノ最後ノ促答状ニ對シテ土
廷ヨリ拒絶ノ回答ヲ領スルヤ否ヤ直々ニ露國
ノ臣民ニ向フテ一篇ノ告示ヲ發シ告ガルニ其
ノ企ノ往昔ノ十字軍ト齊シク神聖崇高ナル義
務ニ本ヅケル者タルコトヲ以テシ而シテ子ツ
セルロドハ歐洲列國ニ向ヒテ露帝ハ唯カニ
土耳其格ノ挑ム所トナレルノミナラズ併セテ英
仏二國ノ挑ム所トナリツノ名譽トツノ權利ト
ツノ利益トハ併ニ之ヲシテ勇往直前スルノ已

外務省

ムヲ得ガレニ至ラシメタリト声言セリ然レド
モ是レ實ニ虚妄ノ言ト云ハガレバカラズ何ト
ナレバ露國ハ英仏二國カツノ艦隊ヲ派遣スル
ニ先チテ巴ニモルタカイ一及ビブラシ一ノ二
州ヲ占領スベキヲ告ゲテ土廷ヲ脅迫シタルノ
ミナラズ英佛二國ノ艦隊ハ唯カタタルガ子一ル
海峡ニ接近シタルノミニシテ未カ海峡内ニ入
ラサルヲ以テ一モ條約ニ違反スル所ナキモ露
國ノ二州ヲ占領シハ是レ故ナクシテ人ノ國
土ヲ侵略シタル者ナレハナリ勿論子ツセイル
ロードノ言ニ據レバ露帝ハ未カ土廷ト戦ヲ開
キタル者ニアラズ帝ハ唯カツノ安全ヲ得ムト
欲シタルノミニシテモルタカイ一及ビブラシ一

ノ二州ヲ占領シテツノ要求ヲ貫クノ担保ニ充
テ土廷已ニツノ要求ヲ容ルハ後々ハ再ビ二
州ヲ還與スベシト言フト虽ドモ而モツノ措置
ハ亦決シテ穩當ナリト言フコト能ハズ況シヤ
將來ノ事ハ逆シノ得テ知ルバカラハレヤ二
州ハ巴ニ七月四日以采露兵ノ侵寇ヲ受ケ數日
ノ後々ツノ占領スル所トナレリ露國豈ニ容易
ク之ヲ還與スル者ナラムヤ

(十)

歐洲列國ハ日ヲ逐フテ益々ツノ憂懼ヲ深クセ
リ然レドモ此ノ時ニ於テモ列國ハ未カ全ク其
ノ平和ヲ維持スルノ望ヲ絶ツニ至ラズ就中澳
國ハ東方ノ均勢ニ利害ノ關係ヲ有スルコト最

モ剽切ナルノ故ニ由リツノ全カヲ傾注シテ平
和ニ事局ヲ結バシコトヲ求メリ彼レハ露國ト
英仏二國トカ相對墨シテ將ニ交戦ヲ開カムト
スルノ中間ニ介立シ困惑出ツル所ヲ知ラズワ
ノ一八四九年及ビ一八五〇年ニ露國ノ援助ヲ
受ケタルノ記憶トツノ革命竟ヲ強壓スルカ為
メニ露國ヲ引キテ常ニツノ輿國トナスノ必要
トツノポエーム及ビサーガ河邊ニ於テスラーヴ
人種カ露帝ノ煽動スル所トナリテ騷乱ヲ起サ
ムコトヲ恐ル、念トハ俱ニ澳帝ツラシワアー、
ジヨゼフヲ拘制シテ露帝ノ政策ニ反對ヲ表ス
ルヲ許サズト虽トモ而カモ更ニ他ノ方面ヨリ
視ルトキハ澳國ハ亦決シテ手ヲ拱シテ土耳其

帝國ノ滅亡ヲ坐視スルコト能ハズ苟モ土耳其
帝國ニシテ一たび滅ビタルトキハ澳國ハ所謂
ル唇亡ビテ齒寒キノ患ナシトセズ且ツ澳帝若
シ英仏二國ニ援ヲ與フルヲ拒マバ二國ハ往年
ノ故智ヲ襲ヒ意太利ニ洪加利ニ波蘭土ニ革命
竟ヲ煽動シテ乱ヲ起サシメ以テ危害ヲ澳國ニ
与フルノ患ナシトセズ右ノ如クナルヲ以テ澳
國ハ終始兩端ヲ觀望シ遲疑逡巡之ヲ久クシテ
決スル所ナク一方ニハ滿心土耳其ヲシテ露國
ノ侵略ヲ免レシメムト欲スルモ他方ニハ更ニ
ツノ全カヲ竭クシテ戦ヲ避ケムト欲ス故ニ兩
者ノ間ニ介立シテ專ラ調停ノ任ニ當リ曖昧模
稜ナル言動ヲ事トシテ以テ一時ヲ塗抹セムト

欲し之レガ為ノ適ニ禍ヲソノ國ニ招クニ至シ
リツノ詳カナルハ更ニ後文ニ於テ記述スル所
アルマシ
露帝ハ一八四一年ノ條約ノ存立スルニ拘ハラ
ズ歐洲列國ハ決シテ自己ノ企ヲ制止スルノ權
利ヲキ者ナリト為セリ故ニ墺國ハ露帝ノ怒ニ
觸レムコトヲ恐レ往キニ仏國外務大臣ドルー
アリド、リユーイーヨリ提出セル列國會議ヲ開ク
ノ說ヲ排斥シ仍テ自ら露土ノ間ニ斡旋シテ調
停ノ勞ヲ執ラムコトヲ求メタルニ露帝ハ墺
國政府ヲ誘フテ遂ニ自國ノ党與ト為スコトヲ
得ベキヲ信シ容易ク之ニ調停ヲ托スベキヲ諾
シタリ次テ墺國ハ更ニ土廷ニ勸告シテ露兵ノ

モルタウイー及ビヴラニイヲ占領シタルニ答
フルニ開戦ノ告示ヲ以テセシテ單ニ一ノ抗
議ヲ以テセシメ而シテ更ニ英仏二國ノ歡心ヲ
收ムルガ為ノ墺相ビエオールハ諸大國ノ大使
ヲ維納ニ招集シ明カニ列國會議ノ名ヲ命セズ
ト虽ドモ事實ニ於テハ一モ之ト異ナラザル使
臣會議ヲ組成シタルニ露國ハ獨リ該會議ニ參
列スルヲ拒メリト虽ドモ該會議ニ於テ調停ノ
公文案ヲ議定シ之ヲ露土二國ニ交附スルトキ
ハ之ニ就キテ更ニ談判ヲ開クコトヲ拒マスト
言ヘリ既ニシテ八月一日ニ至リ調停ノ公文案
ハ已ニツノ成ルヲ告ケリト虽ドモ元來ツノ利
害全ク相容ルハコト能ハサル露土ノ二國ヲシ

テ齊ニク満足ヲ表セシムト欲ニテ起草ニタル者ナルカ故ニソノ文意ハ曖昧模稜ニシテ撞着矛盾ニタル解釋ヲ下スバキノ点頗ル多シ故ニ露帝ハ猶豫ナクソノ公文ヲ容認シ他日自己ノ見ル所ニ從フテ之ヲ解釋スルコトヲ得バキ者トシ且ツ土廷カ他ニ一モ條件ヲ添フルコトナクニテ齊ニク之ヲ容認セムコトヲ要求セリ然レドモ土廷ノ君臣ハ英佛二國ノ大使ト俱ニ苟モ露帝ノ如キモノヲソノ對手トナスニ際ニテハカメテ自己ノ權利ヲ明確ニシテ一点ノ疑義ヲ容レシメガルヲ須要ナリト思料ニ壤國ヨリ交附ニタル調停ノ公文ニ同意ヲ表スルニ先キテ七月二十日別ニ自ラ一ノ公文ヲ發シ土帝ハ

ソノ臣民トノ關係ニ決ニテ露帝ノ干渉ノ容レガルコトヲ告ゲ今日露國ノ要求スル所ハカイナルゾ一ノ條約ヲ始メ何カナル條約ト虽ドモ斷ニテ之ヲ許サスト宣言ニタリ土廷ノ此ノ誠実ナル宣言ハ一切ノ協定ヲシテ之ヲ遂グルニ由ナカラシメ露帝ハソノ調定ノ公文ニ與ヘタル承諾ヲ取消スバキヲ宣言シタリ願フニ此ノ事タル良トヨリ帝ノ權利ニシテ他人ノ得テ間然スル所ニアラズト虽ドモ帝ハ更ニ九月七日ヲ以テ自ラ右ノ公文ニ与ヘタル解釋ヲ公ニシ、カフノ解釋ハ土廷ノ下ニタル説明ト全然相反對ニ而シテ維納ノ使臣會議ハ土廷ノ説明ヲ以テ會議ノ意見ニ合ニタル者ト

之英仏二國ハ露帝ノ公ニシタル公文ノ解釈ヲ
以テ一切ノ協定ヲ画餽ニ帰セシムルモノナリ
ト宣言シ且ツ到底開戦ノ避ク可カラザルヲ察
シテ九月下旬令ヲワノ艦隊ニ傳ハケルガ子
海峡ヲ過キテ君士坦丁堡ヲ防衛スルノ備ヲナ
サシメタリ

墺國政府ハ尚ホツノ全カヲ竭クシテ東方ノ兵
争ヲ防止セムト欲シ首相ビエオールハツノ提
出ニ係ル調停ノ公文ヲ固執シ露土ノ二國ヲシ
テ必ス之ヲ容納セシムコトヲ望ノリ此ノ間露
帝ハオールミエツツニ乘リテ墺帝ニ會見シ之ヲ
誘フテ露國ノ援興ヲラシメムト欲シタルニ墺
帝ハ容易ニ露帝ノ言ヲ容レテ之ニ援ヲ與フル

ノ約ヲ為スコトヲ肯セザリシモビエオールノ
案出セル方策ヲ擧ケテ露帝ト俱ニ窺カニ計ル
所アリ蓋シビエオールノ方策ニ據ルニ墺國ハ
八月一日ノ公文ヲ再ビ露土ノ二國ニ提出シ二
國ハ一モ條件ヲ附スルコトナクシテ之ヲ容納
シ而シテ墺國ハ土帝ニ對シテ露帝ノ公文ニ就
キテ下ス所ノ解釋ハ維細ノ使臣會議ノ下シタ
ル解釋ト一モ異ナル所ナクテ保証スバキ者ト
ス然レドモ是レ唯ク一時ヲ緘縫スル姑息ノ手
段ニ外ナラザルヲ以テ英仏二國ハ十月四日斷
然墺國ノ提議ヲ拒斥シタリ是レ他ナシ露國既
ニ九月七日ヲ以テツノ公文ニ對スル解釈ヲ公
ニシタルノチ露國ノ意見ハ使臣會議ノ意見ニ

異ナラズト認定シ露國自ラ一言ヲ發シテ前言
ヲ取消スコトアラザルニ墺國妄リニ露國ニ代
リテツノ意見ヲ開陳スルハ是レツノ言ハ虚偽
ニシテ又且ツ甚カ危險ナル者ナレバナリ況ヤ
英仏二國カ墺國ノ提議ヲ拒斥シタルト同時ニ
東方ニ於テ早已ニ交戦ノ端ヲ開キタルヲヤ
土廷ハ英仏二國ノ声援ヲ獲テ七月以降銳意ニ
テ戦備ヲ修メ九月下旬ニ至リテツノ戦備ハ略
既ニ其成ルヲ告ケリ是ノ時ニ方リ君士坦丁堡ヲ
首ノ土耳其國內ニ居住スル回教徒ハ露帝カツ
ノ土耳其侵略ノ企圖ニ宗教的ノ意義ヲ寓シタ
ルヲ視テ亦大ニツノ宗教ノ熱心ヲ發シ露國ニ
對シテ忿激ノ念ヲ禁スルコト能ハズツノ狂熱

ノ熾ムナルハ宛モ一八二一年ニ於ケルカ如ク
而シテ九月七日露國ノ公ニシタル公文ノ解
ハ之ヲシテツノ憤怒ノ絶頂ニ達セシメ群民ハ
屢々土帝ノ住居セル宮殿ノ前ニ聚集シテ示威
的運動ヲ行ヒシツノ激昂ノ太甚ニキ遂ニ能ク
土帝ノ心ヲ動カシ加フルニ當時英仏ノ聯合艦
隊ハ巴ニ君士坦丁堡附近ニ乗りテ之ヲ保護ス
ルアリ是ニ於テ土帝ハ九月二十五日ツノ廷臣
ヲ集メテ大會議ヲ開キ翌ニ十六日開戦ノ決議
ヲ爲シ十月四日宣戦ノ詔勅ヲ發シ同月八日土
耳格軍ノ總督オメルパシヤールハ露將ゴルチ
ヤコツフ公ニ一書ヲ送りテモルタグイー及ビ
ワラシールノ占領ヲ撤セムコトヲ促ガシ若シ之

外
省

ヲ聽カサルトキハ十五日以内ニ戰ヲ開クベキ
ヲ告ゲリ

(十一)

土廷ハ既ニ露國ニ對シテ明カニ抗戰ノ決意ヲ
表セリト雖ドモ露帝ハ毫モ之ヲ恐レ、コトア
ラザリキ是レ他ナシ帝ハ一方ニハ填普二國カ
露國ノ為メニ好意的中立ヲ守ルマキヲ期シ他
方ニハ英仏二國カ露國ヲ敵トシテ同盟シテ戰
ヲ開クノ決心アルヲ信セザリシガ故ナリ加之
ナラズ帝ハバルカニ半島ノ基督教徒カ必ズ土
廷ニ反抗スベキヲ慮カリ深ク之ニソノ望ヲ屬
シタリシガ適ニ當時テツサリ及ビエピール
ノ二州ニ於テ基督教徒ノ將ニ起リテ亂ヲ起サ

ハトスルアリ露帝ハ夙トニ希臘ガ一八三二年
ノ條約ニ定メタル疆域ニ満足セズシテ更ニソ
ノ版圖ヲ擴張セムト欲スルノ意アルヲ知リソ
ノアテリ又ニ派遣セル數多ノ間諜ヲシテ往キ
テ右ノ二州ヲ侵略セムコトヲ陰カニ希臘政府
ニ説カシメタルニ大膽ニシテ野心ニ富メル王
妃アメリカリハ王オトシニ勸メテ露國ノ政策ニ
協同セシメカメテソノ國中ニ於ケル露國黨ノ
勢力ヲ扶植シソノ士官兵士等ノ土耳其格ノ領内
ニ赴キテ騒亂ヲ煽動スルヲ許容セリ之ト同時ニ
露帝ハ更ニ波斯王ヲ煽動シ土耳其格ニ叛キテ兵
ヲ起サシメ又丁秣王ト同盟ヲ結ビテバルチツク
海ノ方面ヨリ來ルベキ攻撃ニ備ヘムト欲シ且

外省

ツ土廷ノ大ニ財政ニ窮乏セルヲ知リソノ兵ノ
戦闘ニ勝フルハ六ヶ月ヲ過ル能ハズトナシ
明年ノ春ニ至レハ土廷ハ必ズ辞ヲ卑フニテ和
議ヲ請フベシト確信シタリ故ニ帝ハ土廷ヲ制
服スルニハ必ズ進ミテ之ヲ攻撃スルノ必
要ナシト思料シ敢テ攻撃ノ態度ヲ取ルコトナ
ク而シテ十月三十日其ノ相子ツセルロド
ヲシテ歐洲列國ニ向ヒ露國ハ土廷ヨリ開戦ヲ
宣示シタルヲ以テ之ニ應ニタルニ過キズ而モ
猶ホソノ温和ノ政策ヲ体シテ敢テ他意ヲ存セ
ザルヲ証スルカ為ノ專ラ防禦ヲ旨トシテ妄リ
ニ攻撃ヲ事トセザルヲ告ゲシメタリ
塙相ビエオールハ露國ノ此ノ宣言ヲ聞キテ猶

ホ能ク平和ノ調停ヲ遂グルノ望アリトナシ露
廷ニ向ヒソノ果シテ列國ノ調停ニ應ニテ土耳
格トノ爭議ヲ平和ニ收了スルノ意アルヤ否ヤ
ヲ問ヒシニ子ツセルロドハソノ能ク調停ニ
應スルノ意アルコトヲ答ヘタレハビエオール
ハ再ビ維納ノ使臣會議ヲ開キ十二月五日該會
ニ参列シタル四大國ハ露土ノ間ニ於ケル媾和
談判ノ基本トナルベキ一ノ議定書ヲ承認シタ
リ今ソノ議定書ニ記スル所ニ據ルニ四國ハ齊
シク下記ノ二條件ヲ以テ歐洲ノ均勢ヲ維持ス
ルニ須要欠ク可カラズトナセリ即チソノ一ハ
土耳其帝國ノ領土ハ完全ニ之ヲ保存シテ分割
スルヲ許サズソノ二ハ土帝ハソノ國政ニ就キ

ト
務
省

獨立不倚ノ權利ヲ有シ列國ハ唯カ土帝カソノ
自由ノ意思ニ由リテソノ領内ノ基督教徒ノ為
メニソノ權利自由ヲ保護セシコトヲ勸告スル
ニ止マルコト是レナリ而シテ四國ハ此ノ議定
書ニ一ノ公文ヲ添ヘテ之ヲ土廷ニ送り其ノ露
國ト俱ニ訂結セムト欲スル條約ノ要件ヲ速カ
ニ通報セムコトヲ求メタリ

(十二)

然レドモ歐洲列國ガ平和ノ回復ノ應ニ近キニ
在ルマキヲ期シタル時ニ際シ卒然東方ノ局面
ニ一大變動ヲ生シテ更ニソノ危機ノ破裂ヲ促
カスニ至シリ土耳其ノ軍兵ハ露帝ノ豫シノ算
測シタル所ニ反シテソノ力尚ホ未ダ衰ヘズ進

ミテ露軍ヲ攻撃シテ屢々捷ヲ奏スルヲ得タリ
土軍ハ歐羅巴ニ於テハ數週ヲ出デスシテ小ブ
ラシトテ回復シ露兵トセルビトノ間ヲ遮斷
シ露兵ヲシテセルビーニ入りテ騷乱ヲ煽起ス
ル能ハガラシメ亞細亞ニ於テハ露領ニ侵入シ
テ黑海ノ沿岸ニ在ルサシニコラスノ城壘ヲ略
取シタリ露帝ハ此ノ報ヲ聞キテ大ニ怒リ十月
三十日ノ宣言ヲ忘レテ令ヲソノ艦隊ニ下ダシ
進ミテ小亞細亞ノ土國ノ領海ニ侵入セシメ十
一月三十日露國艦隊ハ土國艦隊トシノ一ノ港
ニ會戦シテ大ニ之ヲ撃破セリ是レヨリ後土廷
ハ復々黑海ニ於テ露國ニ抗戦スルノ力ナキノ
ミナラズ君士坦丁堡ヲ防禦スベキ船艦スラモ

殆レド之ヲ餘サ、ルニ至レリ幸ニシテ當時英
仏二國ノ艦隊ノ君士坦丁堡附近ニ緊留セルア
リ土帝乃チ援ヲ二國ニ求メ令ヲ二國ノ艦隊ニ
傳ヘテホスフオール海峡ヲ過キ黑海ニ入ラシ
ムムコトヲ乞ヘリ然レドモ二國ノ艦隊ガボス
フオール海峡ヲ過ヤテ黑海ニ侵入スルハ是レ
實ニ非常ノ大事件ニシテ疾クヨリシテ已ニ開
戦ニ決シタル佛國政府ハ敢テ此ノ大事ヲ断行
スルヲ猶豫セズト虽ドモ英國政府ニ至リテハ
稍^レ之トツノ趣ヲ異ニセリ蓋シ英國首相アベ
ルヂーヌハ此ノ時ニ於テモ猶ホ未カ開戦ヲ避
ケテ平和ヲ維持スルノ望ヲ絶タスト虽ドモ國
中ノ輿論ハ盛^レニ開戦ヲ主張シテツノ勢ヒ當

ルバラズツノ閣員ノ一人タルバルネルスト
ハ主戦説ヲ主張シテ容レラレザリシカ為メ十
二月五日一タロツノ職ヲ去レリト虽ドモ之レ
ガ為メ國中ノ人心大ニ激動シ日ナラズニテ首
相ハ遂ニバルネルストノ主戦説ヲ用ヒ再ビ
之ヲ内閣ニ入ル、ノ己ムヲ得ガルニ至リ是
ニ於テ英佛二國ハ佛國外務大臣ドルーア、ド、
リユイ、ノ提議ニ本キ十二月二十七日書ヲ露
國政府ニ送りテ英佛ノ聯合艦隊ハ進ミテ黑海
ニ入り而シテ土耳其艦隊モ亦^ツ妄リニ攻撃ヲ事
トセザル以上ハ齊シク之ニ入ルヲ禁スルコト
ナキモ獨リ露國ノ艦隊ニ至リテハ同海ニ留ル
コトヲ得バカラズト告知セリ憶フニ此ノ告知

ト
務
省

タル明カニツノ意ノ開戦ニ在ルヲ表示シタル
コト言ヲ待タス而カモ英併二國が即時ニ開戦
ヲ宣言セザル所以ハ是レ唯カツノ戦備ヲ整へ
及ビ他ニ同盟ヲ得ルニ尚ホ數月ノ日子ヲ要ス
ルカ為メニシテ當時二國ノ意ノ開戦ニ在ルコ
トハ何人ト虽トモ毫モ疑ヲ容ル、コトアラザ
リキ

墺國政府ハ今尚ホカメテ戦ヲ避ケムト欲シカ
メテ英仏二國ニ満足ヲ與フ可キ協高ヲ遂ケ以
テ平和ノ局ヲ結バムコトヲ計レリ此ノ間土廷
ハ十二月三十日ヲ以テ媾和ノ條件ヲ告知シ、
カツノ條件ハ(一)ソノ領土ノ完全ヲ維持シ及ビ
保障スルコト(二)モルタウイリ及ビワラシムニ

放ケル露兵ノ占領ヲ撤回スルコト(三)土國ノ獨
立ヲ保障スルカ為メ嘗テ一八四一年ヲ以テ政
洲列國ノ間ニ訂結シタル條約ヲ復興スルコト
(四)土帝ノ國政ニ関スル獨立ヲ尊重シ帝ハツノ
領内ノ基督教徒ノ為メニ新タニ讓與スル所ア
ルベキモ是レ但カツノ自由ノ意思ヲ以テ之ヲ
為スベキコトノ四箇條ニシテ若シ此ノ四箇條
ニシテ容納セラル、ヲ得ハ土帝ハ今方ニ維納
會議ヲ組織セル四大國ノ調停ニ由リ媾和談判
ヲ開クベシト言ヘリ是ノ時ニ方リ平和ノ破裂
ハ既ニ目前ニ迫リ片時モ猶豫スベキニアラザ
ルヲ以テ墺相ヒエオールハ土廷ノ要求ヲ容レ
テ之ヲ使臣會議ニ提出シ使臣會亦之ヲ可納シ

テ一八五四年一月十三日ビエオール
廷ノ要求ヲ露帝ニ回送セシメタリ

(十三)

歐洲列國ハ皆齊シク危惧ノ念ニ満タサレテ露
帝カ土廷ノ要求ニ就キテ何カナル決定ヲ下カ
サムト欲スルカヲ知ラムコトヲ望メリ然レド
モ露帝カ必ズ四國ノ調停ニ應ジテ退讓ヲ為ス
ベシト思料スルハ是レ帝ノ心事ヲ知ラサル者
ナリ帝カ英佛二國ニ向ヒツノ十二月二十七日
ノ宣言ニ就キテ説明ヲ求メタルハ是レ唯ダ少
シク時機ヲ延バヌカ為ノニシテ始メヨリ退讓
ニ意アルカ為ノニアラズ是ノ時ニ方リ帝ハ既
ニ英國ノ意ノ開戦ニ在ルヲ疑ハズト虽トモ墮

普二國ニ對シテハ猶ホ深クツノ望ヲ屬シ軌近
ツノ勢力ノ大ニ二國ニ加ハリシノ故ニ由リ若
シ迫リテ之ヲ誘フトキハ必ズ来リテ露國ノ援
與トナルベシト信シタリ
是ニ於テ露帝ハオルロツフ伯ヲ維納ニ派シビ
エドベルグ男ヲ伯林ニ送り墮普二國ニ説キテ
露國ノ為メニ好意的中立ヲ守ラシメ仍テソノ
報酬トシテ露帝ハ專ラ二國ト協議シテ東方ノ
均勢ヲ保維スルノ約ヲ為スベキヲ命ゼタリ露
帝ノ此ノ提議タル要スルニ二國ト俱ニ土耳其格
墮國ヲ覆スベシト言フニ外ナラザル者ニシテ
墮國政府ハ此ノ如ク提議ニ對シテ固ヨリ深ク
憂懼ノ念ヲ生ゼサルヲ得ズ故ニ墮相ビエオール

ハ露使オロツフニ向ヒ露帝ガ果シテカニエ
グ河ヲ過キテ土領ニ侵入セザルノ約ヲ為スベ
キヤ否ヤヲ問ヒタルニオロツフハツノ約ヲ
為スコト能ハサルヲ答ヘタレバビエオールハ
遂ニ一月二十八日ヲ以テ墺國ハ全クツノ行動
ノ自由ヲ保有シ豫ニ中立ヲ約スルコト能ハ
ハサルヲ宣言シタリオロツフ之ヲ聞キビエ
オールニ謂テ云ク君ハ吾等ヲシテ遂ニ戦フコ
ト能ハガラシム是レ君ノ國自ラ我ガ國ヲ敵ト
シテ開戦ヲ告示スルニ均シキ者ナリト遂ニ怒
リテ維納ヲ去レリ而シテ之ト同時ニ伯林ニ赴
キタルビエドベルグモ亦ツノ當初ハ容易ク其
ノ使命ノ目的ヲ達スルコト能ハガリキ是ノ時

ニ方リ普國ノ輿論ハ齊ニオロツクニエツツノ原
辱ヲ以テ露國ノ為セル所ナリトナシ露國ニ對
シテ大ニ敵意ヲ表シ自由黨ハ露帝ヲ以テ非革
命黨ノ保護者ナリトナシ之ヲ憎ムコト仇讐ノ
如クマニツーフエールヲ始メ王ノ宰相近臣バ
ニセシ、プールタルス、エセドニノ徒ヨリ太弟キ
イオーム親王ニ至ルマデ悉ク英國トノ同盟説
ニ左袒セルヲ以テ王ハツノ義兄弟辱タル露帝ニ
對シテ大ニ好意ヲ有スルニ拘ハラズツノ請求
ニ應ジテ之ト手ヲ提フルヲ得策ニアラズト思
料シ遂ニ墺帝ト齊ニシテ露帝ノ請ヲ拒斥シタリ
若シ夫レ維納ノ使臣會議ニ至リテハ露帝ガ土
廷ノ提議ヲ斥ケテ猶ホツノ前日ノ要求ヲ固執

シ毫モ四大國ノ調停ニ應スルコトヲ肯ムセザ
ルヲ以テ二月二日遂ニ露帝ノ主張スル媾和條
件ハソノ當ヲ得ナル者ナリト宣言シタリ是日
リ先キ一月二十七日ニ至リ仏帝拿破侖三世
ハ手ツカラ一書ヲ裁シテ露帝ニ送りモルタガ
イリ及ビワラシメノ占領ヲ撤シ而シテ今後露
土ノ間ニ訂結スベキ條約ヲ歐洲列國ノ保障ニ
附セムコトヲ勸告シ、ニ二月八日露帝ハ極メ
テ倨傲ナル言辞ヲ以テソノ良友ニ答ヘテ是レ
露國ヲシテソノ面目ヲ辱カシムト欲スル者ナ
リト言ヒ露國ハ一八五四年ニ於テモ亦能ク一
ハ一二年ニ為セシ所ヲ為スコトヲ得ヤト答
ヘタリ

(十四)

是ノ時ニ方リ英佛二國ハ百方手段ヲ竭クシテ
墮普二國ヲ誘ヒ相俱ニ一大同盟ヲ組織シテ露
國ニ當ラムト欲シ人ヲシテ歐洲全土ヲ舉ケテ
將ニ一大戦乱ヲ惹起セムトスルノ恐レアラシ
メタリ蓋シ英佛二國ハ墮國ノ援ヲ得ルニアラ
ズムハ陸上ニ於テ露國ニ攻撃ヲ加フル能ハズ
故ニ二國果シテ露國ト戦ハムト欲セハ須ラク
墮國ヲ誘フテソノ同盟ニ加ヘザルベカラズ然
レドモ墮國相ビエオールハ二國ノ為メニ賣ラレ
ムコトヲ怕レ二國ガ既ニ露國ニ對シテ明カニ
戰意ヲ表シ復タ退クヲ許サバニ至リタル後
テニアラズムハ二國ト俱ニ何カナル約束カモ

結アコトヲ欲セズ故ニビエオールハ先ツ二國
ヨリ露帝ニ最後ノ促答状ヲ送りテ即時ニモル
タウイ及ビヴラエーノ占領ヲ撤セシナムコト
ヲ求メ露帝若シ之ニ應セサルトキハ斷然戦ヲ
開ク可キヲ告ゲムコトヲ要求シ二國ハツノ要
求ヲ納レテ二月二十七日最後ノ促答状ヲ露帝
ニ送りタリ然レトモ英佛二國ノ兵未ク戦闘ヲ
開始セサルニ及ビテ墺國ノ兵獨り出テ、戦ヲ
開クコト能ハズ且ツ墺國ハ露兵ノツノ東境及
北境ニ侵寇スルノ虞アルヲ以テ須ラク普國
ト俱ニ親密ナル同盟ヲ結ヒテツノ侵寇ニ備ヘ
ザルベカラス故ニビエオールハ佛相ドルーア
シ、ド、ルエーイ、及ビ英相クラント俱ニ百方

カヲ竭クシテ普國ノ援助ヲ得ムコトヲ求メタ
リ然レドモ當時ビエオールノ心中ニハ別ニ秘
計ノ存スルアリ他ナシ彼レハ先ツ英佛二國ノ
兵ヲミテ進ミテ戦ヲ開カシメ而シテ墺國ノ兵
ハ普國ノ兵ト合シテ靜カニ後陣ニ備ヘ之ニ加
フルニ更ニ日耳曼聯邦ノ兵ヲ以テシ仍テ此ノ
強大ナル兵カヲ擁シテ西交戦國ノ間ニ武裝的
仲裁ヲ施シ遂ニ歐洲列國ヲシテ墺國ノ制令
ニ服従セシムルニ至ルコト是レナリ憶フニ此
ノ計略タル亦頗ル妙ナラザルニアラズ但ク之
ヲ実行スルニハ須ラク普國ノ協賛ヲ得ザルベ
カラス然ルニ普國ハ之ニ由リテ未ク大ニ獲ル
所アラザルヲ以テ竟ニツノ協賛ヲ與フルヲ肯

ムセガリキ
曩キニ普王フレデリック、ギョームヲ制止シ
テ露帝ノ提議ニ應スルコトナカラシメタル自
由党ハ今ヤ更ニ之ヲ勸誘シテ四國同盟ニ加入
セシメムト欲シ殆ムド將ニソノ目的ヲ達セム
トスルノ状アリ然レドモ王ノ左右ニハ更ニ一
ノ有カナル党與ノ露國ニ對シテ大ニ好意ヲ表
シ墺國ニ對シテ痛ク惡感情ヲ抱ケル者アリ是
レ則チゲルラツヒ、ドーナ、スターン等ヨリ成レ
ル十字架党ニシテ該党ハ王妃及ビ王ノ第二弟
シヤル、親王ノ後援ヲ有シ加フルニビスマルク
ノ遙カニ之ヲ助クルアリテ極力王ノ自由党ノ
説ニ聽従スルヲ妨害セリ當時ビスマルクガソ

ノ同志ニ與ハタル一信書ノ中ニ載スル所ハ明
カニ該党が王ヲ誘フテ自党ノ政策ヲ採用セシ
ムルニ何カナル論柄ヲ用ヒシカヲ知ルニ足レ
リ即チ該党が王ニ説ケル所ヲ示サシニ云ク王
ノ為ス所ハ適ク墺國ノ盛大ヲ加フルニ過キス
云ク墺國ハモルタウイ一及ビウラシ一ノ二州
ヲソノ有トナサムコトヲ望ノリ云ク墺國ハ波
蘭土ヲ再興スルノ企アリ彼レ果シテ此ノ企ヲ
実行セバ普國ハ之レカ為メニ數州ノ地ヲ失ヒ
而シテ墺露二國ノ間ニ新タニ一大國ノ介立セ
ルヲ以テ從來ノ如ク二國ノ間ニ容易ク紛争ヲ
醸シ軋轉ヲ生スルコトナカルベシ云ク墺國ハ
東方ニ於テ專ラ自國ノ利益ヲ求ムルニ汲々

リト虽トモ普國ハ宜シク日耳曼聯邦ト糾合シ
テ聯邦全体ノ利益ヲ保護セサルベカラズ云ク
普國假令ヒ墺國ト相結フコトアルモツノ實ハ
墺國ヲ援ケテ露國ニ敵スルニアラステ墺國
ヲ控制シテツノ運動ノ自由ヲ得セシメガルコ
トヲ主トセサルベカラズ云ク墺國カ露帝ノ恩
ニ酬フニ怨ヲ以テシ而カモツノ實必ズモソノ
敵手タル英佛二國ヲ援助シタルニアラガルノ
結果ハ他日必ズ列國ノ憎ム所トナリテ復々之
ト俱ニ齒ヒスル者ナキニ至ルノ時アルベシ此
ノ時ヲ以テ普國ハ日耳曼ヲ墺國ノ手ヨリ奪ハ
ムニ露國ト雖モ將々英仏二國ト雖モ必ズ之ヲ
妨グルコトナカルベキナリト憶フニ當時普王

ハ果ニテ能クビスマルクノ深謀遠慮ヲ解シタ
ルヤ否ヤ是レ余輩ノ得テ知ル所ニアラズト虽
トモ王ハ元來露帝ニ向ヒテ大ニ好情ヲ有スル
ヲ以テ就中十字架党ノ説ニ最モツノ耳ヲ傾ケ
リ王ハ常ニ露帝ヲ尊信シテ東方ニ於ケル基督
教徒ノ救濟主トナシ露帝ト均シク土耳其格ヲ以
テ不治ノ病ニ罹レル者ナリト揚言セリ且ツ王
ハ痛ク拿破破烈翁三世ヲ忌ミテ斷シテ之ト俱ニ
手ヲ携フルヲ欲セズ故ニ王ハ先ツ英國ニ問フ
ニ其ノ能ク普國ヲ助ケテオルニエツツノ屈辱
ヲ雪カシメ及ビ之ヲシテヌルニヤテール州ヲ
回復セシムベキヤ否ヤヲ以テシタルニ英國ハ
王ノ此ノ問ニ對シ斷シテ然ラサルヲ明答セリ

ト虽トモ而カモ尚ホ倫敦駐劄ノ普國大使バ
セシノ言ヲ信シ普王ヲ誘フテソノ援與トナス
ノ必ズシモ望ムベカラザルニアラズト思科セ
リ然レドモ是レバシセシカソノ主ニ對シテ有
シタル勢力ヲ自信スルコト過大ナリトノ致ス
所ニシテ普國ハバシセシカ英國政府ニ對シテ
普國ノ四國同盟ニ加入スルハ殆ムド確實疑ヲ
容レハルカ如ク声言セルヲ聞キテ大ニ怒リバ
シセシノ言ノ本國政府ノ意ニ出テタル者ニア
ラザルヲ告ゲ且ツ四國同盟論ヲ主唱セルプ
ルタレヌヲソノ左右ヨリ斥ケ終ニ一八五四年
三月初旬ヲ以テ普國ハ斷ニテ露國ヲ敵トシテ
戰ヲ開カサル旨ヲ宣言シタリ然レドモ普王ノ

意ハ要スルニ何人ニ對シテ敢テ讒隙ヲ構ヘガ
ルニ存スルヲ以テ更ニ特使ヲ倫敦及ビ巴里ニ
送りソノ他意ナキヲ辨疏セシメ且ツ英佛普墺
ノ協定ニ由リテ一ノ議定書ヲ作り之ヲ以テ露
土二國ノ間ノ媾和條約ノ基本トラシムベシト
ノ議ニ對シテハ敢テ異論ヲ唱フルコトアラザ
リキ
右ノ議定書ハ一八五四年四月九日ヲ以テ維納
會議ノ採納スル所トナレリソノ規定スル所ニ
據ルニ英佛墺普ノ四國ハ東方問題ニ就キテ固
ク相結合シ目下露土ノ間ニ生シタル争件ヲ決
定スルニ方リソノ中ノ一國ハ決シテ他ノ三国
ヨリ分離スルヲ得ベカラザル者トシ而シテ露

土ノ間ニ媾和條約ヲ協定スルノ基本トシテ四
個ノ條件ヲ採用シタリツノ條件ハ(一)土耳其帝
國ノ完全ヲ維持スルコト(二)露兵ヲシテモルタ
カイー及ビワラシーノ二州ヨリ退去セシムル
コト(三)土帝ヲシテツノ獨立ヲ全クシツノ自由
ノ意思ニ由リテ土領内ノ基督教徒ニ自由及ビ
特權ヲ讓與セシムルコト(四)土耳其格ノ政治上ノ
關係ヲ規定スルニ必要ナル保障ヲ設ケ以テ歐
洲ノ均勢ヲ保維スルノ方法ヲ協定スルコト即
チ是レナリ

(十五)

四大國が相俟ニ以上ノ如キ協定ヲ為シ、時ニ
際ニ東方ノ危機ハ方ニツノ頂點ニ達シ英佛二

國ハ既ニツノ戰備ヲ終リ季候亦春暖ニ向ヒタ
レハ復々久シクツノ開戦ノ期ヲ延バスコト能ハ
ス勿論此ノ時ニ於テモ墺國ハ猶ホツノ辭ヲ普
國ノ拒絶ニ托シテ露國ト戦フヲ肯セズト虽ド
モ之ヲ誘フテ戦ヲ開カシムルニハ英佛二國先
ツ自ラ進ミテ戦ヲ開カサルベカラス若シ夫レ
露帝ニ至リテハ丁抹及ビ瑞典ヲシテツノ中立
ヲ守ラシムル能ハガリシカ為メバルチツク海
ニ於テ敵ノ攻撃ヲ受クルノ患ヲキニアラス又
波斯王ヲシテ終ニ土耳其格ニ叛キテ兵ヲ擧ケシ
ムルコト能ハガリシト虽ドモ希臘カ陰カニ正
ピール及ビテツサリーノ基督教徒ヲ煽動シ土
廷ニ叛キテ乱ヲ為サシムルアリモシテ子テ口

モ亦土廷ニ對シテ叛旗ヲ掲ケムトスルノ色ヲ
示セルアリ。墺國ノ兵ヲ榮シテ英仏二國ノ勸誘
ニ應セザルアリ。頼リテ以テソノ意ヲ強クスル
ニ足ルベキ者亦甚カ少シトセズ。故ニ帝ハ傲然
トシテ英仏二國ヨリ送レル。二月二十七日附、
照會ニ答フルコトヲ拒絶シタリ。此ノ一軍既ニ露
帝ガ二國ノ挑ミニ應ジテ開戦ヲ諾シタルヲ証
スル者ニシテ二國ハ遂ニ三月下旬ヲ以テソノ
開戦ノ告示ヲ發セリ。是ヨリ先キ二國ハ三月十
二日ヲ以テ土耳格ト俱ニ同盟條約ヲ結ヒソノ
後ヲ又中立國ノ權利及ビ海上捕獲ノ權利ニ關
シテ北米合衆國ト俱ニ一ノ條約ヲ訂結シ、仍テ
合衆國ヲシテ嚴正中立ヲ守ルベキヲ約セシメ

以テ二國ノ運動ノ自由ヲ保全ニ次テ更ニ四月
十日ヲ以テ二國ノ間ニ明カニ同盟條約ヲ訂結
シ、二國ハ決シテ露國ト俱ニ各別ニ條約ヲ結ブ
コトヲ為サズ。又開戦中各自ソノ國ノ利益ヲ計
ルガ如キコトナガルベキヲ約シタリ。且ツ二國
ハ希臘ニ對シテ保護國タル資格ヲ有シ之ヲ監
督スルノ權利アルヲ以テソノ猥リニ土耳格ノ
領土ヲ攪乱スルヲ制止セムト欲シ相謀リテ一
個ノ艦隊ト一軍ノ兵トヲピレニ派遣シ、日ナ
ラスニテ希臘ノ野心ヲ抑遏スルヲ得タリ。而シ
テ之ト同時ニ二國ハソノ兵力ノ大部ヲ黑海ト
タニユーラ河邊トニ集中シ、歐洲列國ヲシテ二
國ガ露國ト俱ニ一大決戦ヲ試ミルノ日ノ應ニ

近キニアルベキヲ信セシタリ

近キニアルベキヲ信セシタリ
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

外務省

外務省

